
SKY EARTH

齋藤ノベオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S K Y E A R T H

【Nコード】

N 1 3 2 3 Z

【作者名】

齋藤ノベオ

【あらすじ】

エネルギー資源が枯渇した世界。人々は資源が残された地域に密集し、その資源を巡って対立の溝を深めていた。そんな中、ある国が他国に向けて侵略を開始する。拡大する戦火の中で、戦闘機に変わって生み出された生物兵器「ドラゴン」を追う青年、復讐を誓う女、そしてたった一人の家族のために戦場を駆ける男。様々な思念が絡み合った時、真の闘いへの幕が開く。

試合開始

闘技場。

そこは、鳴り止まない歓声で埋め尽くされた娯楽の場。しかし、選手達にしてみれば、敵対心という名の刃をむき出しにさせる舞台だった。

その闘技場の控え室で、一人の男がベンチに腰掛け、目を閉じていた。

男が出場する試合が始まるまで、残り五分を切っているというのに、誰も控え室まで呼びに来ないのは、この男が常連だということ を物語っている。

男は試合開始三分前になると目を開き、あらかじめベンチに置いておいた自分の「商売道具」を身に付けていく。

防弾チョッキを着込み、腕と足の関節にサポーターを着けていく。左腕には防弾・防爆・防刃の三拍子が揃ったシールドを取り付ける。太もものレッグホルダーにはハンドガンを装備し、腰にはナイフを巻きつける。背中にメートルほどのブレードを背負い、最後に右腕でアサルトライフルを持ち上げた。

常人では立ち上がることにすら不可能なこの重装備を、男は強靭な肉体を駆使して使用する。

装備が整った男は、控え室を出て、選手入場口であるターンテーブルまで歩いていく。すると、ターンテーブルへと続く廊下の向かい側から、よく見かける顔の男が歩いて来た。

男はそのまま無視して通りすぎようとしたが、案の定、話しかけられた。

「……あなたにとつちゃ、消化試合かもしれないが……」

「……………」

「俺にとつては、良い判断材料になる。あなたと闘うためのな」

「……闘う？ 殺すの間違いじゃないのか？」

「……こんなところでやられんなよ」

男はそう言うと、最後に「見てるからな」と付け加え、去っていた。

男は、たった今去っていった男の試合中継を、見たことがあった。マーカスと呼ばれるその男は、いずれの試合でも相手選手を殺してしまうそうだった。

出来れば、あたりたくない相手だ。男はそう考えながらターンテーブルに辿り着く。

この位置からでも観客の歓声が届いてくる。

観客の大多数が自分の名を呼んでいるにも関わらず、男が考えていることはいつも一つだった。

「ホリー……、今日も必ず帰ってくるからな……」

男は、目の前に用意されているターンテーブルに足を踏み入れ、その時を待った。

「レディース、アンド、ジェントルメン！ 『ゲオルギウス』にお集まりの皆さん！ 今日も素晴らしいカードが組まれました！ ぜひ注目してってください！ それでは、選手入場！」

男の乗っているターンテーブルが起動し、闘技場の広大なフィールドへと上昇していく。

観客達は男の姿がフィールドに現れると同時に、一斉に歓声を上げた。

それと同時に、その歓声に負けない位の音量で、実況の男がマイク片手に解説する。

「その通り！ 皆さんご存知のベルトウェイ・ゴールドマンが今回の防衛戦の主役です！ 身長百八十八センチ！ 体重九十五キロ！ 筋骨隆々の大男！ ゲオルギウス初参戦から無敗の四十四連勝！ 不屈の精神と強靭な肉体を持つこの男を止めることは出来ないのか！？」

相変わらず前置きの長い実況の男を尻目に、ベルトウェイは今回のフィールドを見渡す。

天気は晴天、曇一つ無い昼下がりの午後だ。

いつものごとく、丁度サッカーフィールド一個分の広さのフィールドには、高さ一メートル半ほどの遮蔽物が、点々と置いてあるだけだった。地面は、学校にあるグラウンドとさして変わらない砂となっている。

今回は、この遮蔽物に身を隠しながら闘えということか。

ベルトウェイは、試合開始と同時に移動するポイントを決めていた。

見たところ頑丈そうなコンクリートで出来ているが、それは相手の武装によって変わってくる。ベルトウェイは相手側の入場口を見つめた。

「しかし！ たとえいくら不屈のベルトウェイ選手であっても、今日の試合結果は予測出来ませんよ！ 今回の挑戦者はこちらですよ！ どうぞ！」

そのアナウンスと同時に、相手側のターンテーブルが上昇してくる。

現れたのは、子供だった。

しかも、女。

観客の落胆の音が、一斉に響き渡る。

そんな観客の落胆を見透かしていたのかのように、実況の男が声を張り上げた。

「皆さんの言いたいことはわかりますとも！ 確かに初めて彼女を見たときには私も驚きました！ 思わず観客席までお戻り頂こうと考えたほんです！」

そこで闘技場が少し沸く。観客の興味が自分に戻ってきたところで、実況の男は続ける。

「しかし！ 人は見た目によりません！ 今から言うこの一言でご理解頂けるでしょう！ 彼女は先日、ゲオルギウスランク『十五位』

に認定されました！」

その瞬間、闘技場全体がどよめきたつ。

ベルトウェイも、この発表には驚いた。

民間の娯楽として機能しているゲオルギウスという競技は、対戦のカードのバランスが狂わないよう、選手達の成績に応じてランク付けがなされている。

ランクの数が少ないほど強く、逆に多いほど弱い順になっているため、実力の差が開かない仕組みになっていた。

ベルトウェイのランクは十四位。全世界の選手を合わせると二百人近くいると言われるゲオルギウスの競技人口の中では、間違いなく上位に位置づけされる。

対して、少女のランクは十五位。四十三戦無敗のベルトウェイが十三位ということは。

「今回の挑戦者、名前はイーリス・サングネイアちゃん！ 年はゲオルギウスの年齢制限ギリギリの十八歳！ 身長は百六十二センチ！ 体重は言わないでおきましょう！ そんな彼女に付けられてしまったあだ名は、『ボマー』です！」

「ボマー……」

ベルトウェイはイーリスの武装を確認する。

しかし、イーリスがその体格に似合わない厚手のトレンチコートを羽織っているせいで、見た目からは判断出来なかった。

「ルールを説明します！ 制限時間は十分！ 持ち込める物は『個人で携帯出来る物』なら何でもOK！ 勝敗条件は相手選手がギブアップ、もしくは十秒以上地面に背中がついていた場合、そして死亡した場合です！ ですがいくら死亡がカウントに入るからといって、戦意喪失した相手に向かつての攻撃は許されません！ 一応『競技』ですのでスポーツマンシップにのっとり行ってください！

それではスタンバイ！」

アナウンスが終わると、一気に闘技場が静まり返る。

天井近くに設置してある巨大スクリーンに、大きく「Ready」

の文字が表示された。

どちらにしても、手早く終わらそう。

自分のためにも、少女イーリスのためにも、そしてホリーのためにも。

巨大スクリーンに大きく「Go」の文字が表示された瞬間、ベルトウェイは一番近くにある遮蔽物に身を隠した。

「おっと！ ベルトウェイ選手！ さっそく遮蔽物に身を隠す戦法をとりました！」

これでしたいに距離を詰めていけば、接近戦に持ち込める。

ベルトウェイは次の遮蔽物に向かって飛び出そうとしていた。するとその時、イーリスのいる位置から、バシユンっと、何かが飛び出してくる音がした。

急いで確認すると、ロケットランチャーの弾頭が、こちらに向かって来ていた。

ベルトウェイは次の遮蔽物へと飛び込んだ。

すると、ついさつき自分の居た遮蔽物が、爆風と共に砕け散る。

間一髪、左腕のシールドを展開したベルトウェイは、飛んでくる破片に身を晒さずに済んだ。

「恐ろしい！ 何ということでしょうか！ 少女の細腕に似合わない重火器が火を噴きました！」

ベルトウェイは、遮蔽物から右腕だけ出すと、アサルトライフルの弾丸を周囲にばら撒く。するとそれに応じるかのように、何かが風を切って自分の方に飛んで来た。それを確認したベルトウェイは、またもや別の遮蔽物に飛び込む羽目になった。

手榴弾だ。

おかげでまたも、ベルトウェイはシールドの世話になる。

「挑戦者イーリス！ ベルトウェイ選手を寄せ付けません！」

ボマーか……、分かった気がする。

ベルトウェイは一人で納得すると、次から次へと遮蔽物を変えていく。それを追うようにイーリスも、グレネードランチャーを連射

してきた。

フィールドの遮蔽物が、瞬く間に爆破されていく。

しかし、それと同時にイーリスは、ベルトウェイとの距離が縮ま
っているのに気付いた。

ベルトウェイはアサルトライフルを投げ捨てると、整った顔立ち
に焦りを見せ始めたイーリスに対して、遮蔽物越しにハンドガン
を連射する。二、三発の銃弾がトレンチコートに命中したが、まるで
衝撃を吸収されたかのように地面に落ちただけだった。

そしてイーリスも、近くの遮蔽物に隠れる。

どうやらあのトレンチコートは、俺のシールドと同じく防弾らし
い。

「接戦です！ 誰がこの展開を予想出来たでしょうか!？」

しかし、あのコート……、防弾の上に重火器を収納しているのか？

「ベルトウェイ選手！ 決定打を見失っています！」

確かにコートの中に、見た目からは想像出来ない重火器を隠して
おけば、初めて対戦する相手の意表を突くことは出来るだろう。だ
が、それでは少女の長所である身軽さが無い。

「イーリス選手！ またも重火器で攻撃します！」

ベルトウェイは、イーリスのいる遮蔽物へと全速力で駆け出した。
後方で爆音が鳴り響いているが、無視して腰のナイフを抜く。

「ああと！ ベルトウェイ選手！ なりふり構わず突撃していく
！」

ベルトウェイが迫ってきていることに気付いたイーリスは、急い
でその場を離れようとする。しかし、飛んで来るナイフがイーリス
の行く手を阻む。

そこでイーリスは、ロケットランチャーを構えると、向かってく
るベルトウェイに向けて発射した。

観客が息を呑む中、ベルトウェイは近くにあつた遮蔽物を踏み台
にして、飛んできたロケットランチャーの弾頭を、飛び越えた。

そのまま背中ブレードを抜くと、啞然とするイーリスの喉元に

突きつける。

しばらくの静寂の後、イーリスは静かに両手を挙げた。

観客が、一斉に沸いた。

「と！　　いうわけで今回の防衛戦！　見事にベルトウェイ選手の防衛成功です！　挑戦者イーリス選手の攻撃も目を見張るものがありました！　しかしそこは経験の差か！？　ベルトウェイ選手の勇気ある特攻によって幕を閉じました！　最後に両者の健闘を祝って盛大な拍手を！」

闘技場が割れんばかりの拍手に包まれる中、ベルトウェイはブレードを背中に仕舞うと、悔しそうな顔をしているイーリスに向かって言った。

「……もっとマシな稼ぎ口があるだろう？」

「……早急にお金が欲しかったの」

イーリスはそう答えると、僅かに赤みを帯びている長髪を翻し、自分のターンテーブルへと消えていった。

「なお、今回の防衛戦の結果は後日公表となります！　また、勝者であるベルトウェイ選手には多額の賞金が授与されます！　次回も彼らの活躍に期待しましょう！　マイケル磯崎がお送りしました！」

優しい嘘

競技が終わった後、ベルトウェイはヘルスセンターに来ていた。十日に一度、この病院に行くことが習慣となっている。

ベルトウェイは、馴染みのドクターにゲオルギウスで得た賞金の一部を渡した。

「怪我は？」

「大丈夫だ」

そう返したベルトウェイに、ドクターはため息を吐くと、あらかじめ柵に置いてあった薬を渡した。

「じゃあ俺はこれで……」

「ホリーちゃん、早く良くなるといいな……」

「ああ　ドクターにはいつも感謝してる」

「ああ。よろしく伝えておいてくれ」

ドクターがそう言うと、ベルトウェイは部屋を後にした。扉が閉まるまで、ドクターはベルトウェイから目を離さなかった。

ベルトウェイは自宅に着くと、真っ先に娘の部屋に向かう。

「お父さんお帰りなさい」

「……ただいま」

今年で十八になる娘、ホリーが出迎えてくれた。

「今日は仕事、早かったんだね？」

「……うまくいったんだ」

「そっか」

ベルトウェイは、先ほどドクターから貰った薬を取り出す。

「これが明後日からの分だ」

ホリーはベッドに横になったまま手を伸ばし、それを受け取る。

「うん　でもこれ、凄く高価なんだよね……？」

「お前が気にすることじゃないさ」

「……ありがとう、お父さん」

「ああ。今日はもう寝なさい」

「うん……おやすみなさい」

「おやすみ。ホリー」

ホリーは布団を深く被ると、すぐに寝息を立て始めた。

その様子を見てベルトウェイは微笑むと、ベッドの脇に置いてある椅子に座り、ホリーの寝顔を見つめる。

ベルトウェイには、重い難病に苦しむ娘が居た。

軽い運動でも命に関わるので、ドクターから、家の外には出れないだろうと言われている。また、治療には高価な薬品を使用しなければならなかった。

そのため、ベルトウェイが危険と引き換えに多額の報酬を得られるゲオルギウスに挑戦するのに、そう時間はかからなかった。

静かに寝息を立てるホリーを見ながら、ベルトウェイはその頭を撫でてやろうとする。しかし、寸前で思いとどまり、その手を退けた。

ベルトウェイは、自分に問いかける。

「ホリーは、許してくれるだろうか……？」

ゲオルギウスという競技を行う以上、人を殺めたことが無いとは言えない。

もし、ホリーの病気が完治して、来るべき時が来たときも、自分は笑っているのだろうか。

そうだとしたら、俺は、異常者だ。

しかし……娘の、ホリーのためになら、俺は何にでもなる。

ベルトウェイはそう、亡き妻に誓うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1323z/>

SKY EARTH

2011年12月5日23時56分発行